

30-0816

バナナの品種と熟度の違いによる免疫賦活活性の多様性

○岩澤 晴代¹, 山崎 正利¹ (1 帝京大薬)

【目的】バナナは抗酸化作用や免疫賦活活性があり、さらに神経伝達物質であるドパミンやセロトニンを含むなど、成分や作用に特徴のある食材であることを報告してきた。今回は、バナナの免疫賦活活性が熟度や品種によって違いがあるかを好中球集積作用、サイトカイン誘導能、マクロファージ活性化作用(形態変化)を指標に検討した。**【方法】**1) キャベンディッシュバナナ(通常種)とスウィーティオバナナ(高地栽培種)の2種類を用い、熟度を5点設定し、抽出上清をICR雄マウスに腹腔内投与した。接種5hr後に腹腔細胞を取り出し、総白血球数と好中球%を調べた。2) サイトカイン誘導能は、接種4日後に腹腔細胞を取り出し、TNF- α とIL-12誘導能についてELISA法で測定した。3) マクロファージ活性化作用は、マウス腹腔細胞を採取したのちマクロファージ monolayer とし、抽出上清を添加し、培養を行い顕微鏡にて観察を行った。**【結果】**1) 総白血球数増加作用、好中球集積作用は熟度に比例して強くなった。キャベンディッシュよりもスウィーティオの方が強い傾向が示された。2) サイトカイン誘導能は食べ頃以降のバナナで強まっていた。3) バナナ抽出上清を添加することにより、マクロファージの伸展が見られ、品種・熟度によって強さが異なっていた。**【考察】**免疫賦活活性の指標により異なるが、熟度や品種の違いにより免疫賦活活性の強さが異なる多様性が示唆された。